

博士学位論文審査要旨

2009年1月24日

論文題目： 子どもの世界観と想像力

学位申請者： 高島 香

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 山形 頼洋
副査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉
副査： 総合政策科学研究科 教授 Anne Gonon

要 旨：

現代社会において子どもをめぐる問題は多く、また、その深刻さも重大である。本論文は、これらの問題解明の基礎作業として、子どもに固有のものの方の見方、考え方を明らかにすることを目指す。そのために、児童文学が対象として選ばれ、哲学的に鍛錬された概念を使って分析される。

第一章「ベルクソンの時間論と児童文学の中の時間」では、児童文学の中のタイム・ファンタジーを代表するいくつかの作品が考察の対象とされる。それらの作品の中の時間が、時計では計ることのできない異質な時間であることが指摘されるとともに、そのような異質な時間の可能性を明らかにしたベルクソンの持続概念が、克明に展開される。

第二章「バシュラールにおける想像力の垂直性と文学の風景」、第三章「バシュラールにおける想像力と子ども観」では、バシュラールの想像力論によって児童文学に現れる風景を読み解き、子どもにとって物質とは何かが究明される。子どもにとって、また、子どもとしてもものを考える詩人にとって、物質は、科学の教える大人の物質観とは異なる相貌をしている。子どもは想像的唯物論を生きているのに対して、大人は、科学の合理的唯物論を信奉している。

子どもが生きている想像的唯物論は、夢に基づいたものである。バシュラールにとって、夢は空想ではなくて、科学的な合理性とは異なる仕方で実在を知る方法である。夢は、科学が覆い隠してしまった我々の原初の物質観に到る道を開くのである。夢こそ物質の内密性（内奥）に裏打ちされた物質的想像力にほかならない。物質的想像力の原型は、物質に直接働きかけ、物質に抵抗として出会い、その抵抗を克服して物を製作する労働において、意志が物質の諸抵抗を統一する働きにおいて見出される。物質的想像力によって物質は力動的な生成する力として経験される。意志の夢である物質的想像力によって文学の風景は創られる。

第四章「児童文学の子ども観」では、第一章で取り上げたタイム・ファンタジー作品を含む、いくつかの児童文学作品の風景と時間とを、バシュラールの物質的想像力に基づいて考察することによって、児童文学が、大人のものの方の考え方とは異質な、子どもに独自の世界観の表現であることを改めて確認する。

本論文は、児童文学の風景の含意する意味をバシュラールの想像力論を使って展開し、子どもの世界観の独自性を明らかにした、また、このことによって、子供の内面世界を研究する新しい方法概念を提供した。その独創性とその成果は高く評価されるべきである。さらに、副次的には、これまで科学哲学者と夢の文学者として分裂、矛盾して理解されてきたバシュラールを、統一的に把握する視点を確立したという点も見逃せない。

よって、本論文は、博士（ヒューマン・セキュリティ）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有すると認められる。

総合試験結果の要旨

2009年1月24日

論文題目： 子どもの世界観と想像力

学位申請者： 高島 香

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 山形 頼洋

副査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 総合政策科学研究科 教授 Anne Gonon

要 旨：

高島 香に対する総合試験を2009年1月24日午前10時40分から同11時40分まで、同志社大学今出川校地博遠館にて実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する質問に対して的確に答え、論文の主張の正しさを説得力ある仕方で擁護した。また、関連する児童文学ならびに哲学についての質疑応答においても、論文で展開された議論を十分に裏付ける専門知識を有することを証明した。また、語学試験（フランス語）も同時に行ったが、学位申請者が、研究文献を自由に読みこなす高度の運用能力と知識とを持つことが、確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 子どもの世界観と想像力

氏名： 高島 香

要旨：

本論文では、哲学と児童文学の接点を手がかりにして、子どもの世界観と想像力を探求する。その出発点として第一章では、子どもが生きている内面世界の時間をベルクソンの時間論と児童文学のファンタジー作品との共通性に基づいて考察する。アリソン・アトリーの『時の旅人』とフィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』という児童文学作品では、子どもがファンタジーの世界の人々と共に生きる間、現在の世界の時間を測る時計は停止し、その役割を果たさなくなる。それらの物語の中にある現在の世界とは大人にとっての日常生活の時間を意味するが、子どもの時間はそれとは異なる時間として表現される。まずベルクソンの時間論によれば、時計によって測られる時間は、意識の表面において習慣化された行動のための時間であり、表面の習慣から離れた深みにある時間は「持続」である。これを物語に置き換えると、子どもの生きるファンタジーの時間は、大人の習慣的行動のための時計の時間から解放されたところある持続となる。ベルクソンの『意識に直接に与えられたものについての試論』の中で、時計の針の時間は、針という対象とその知覚の同時性の数として数えられる時間である。そこでは時間は過去の対象の位置と現在の対象の位置のような前後関係に置き換えられ、時計による時間は同時性の数として数えられる「等質的時間」になる。数を数えるとき、対象はすべて一という相互外在的な共通項になる。学校などで生徒の数を数えるとき、一人一人が内的に感じたり考えたりすることは省かれる。それに対して『時の旅人』の腕時計の針の停止や『トムは真夜中の庭で』の「真夜中の十三時」という時計盤にない時刻を時計が打つことにおいて展開されるファンタジーの時間は、外側から測ることのできない子どもの時間への到達を意味する。その時間は数えて測定する方法によっては理解しえない内面において体験する心の動き、すなわち持続であり、ベルクソンによれば持続は知覚における等質性を介さない直接性にある「直観」という認識の仕方によって到達される。この「直観」は一人一人の子どもの生きる内的な時間への「共感」でもある。『時の旅人』と『トムは真夜中の庭で』では、登場する子どもが過去の人々とともに生き、喜びや悲しみの感情を共にする。子どもが時計の時間から離れるという設定によって、過去は現在と等質的に並置して測るための時間ではなくなり、子どもが生きた時間としての過去に到達し、過去の人々と内側から共感するということが物語の中で実現される。従って、意識の習慣的な働きを越えて持続に到達しようとする共感とは、子どもだけの問題ではない時間観に接近する方向性を持っている。

第二章ではバシュラールの著作に基づいて、時間を新たな創造として持続させる力である想像力を考察する。バシュラールによれば、持続はベルクソンの言うように「直接的に与えられる」ものではなく、瞬間を次の瞬間に連続させようとする働きの結果として形成されるものであり、時間の連続性と創造性の源泉となるのは持続ではなく「垂直的時間」である。この「垂直的時間」において生産的に活動するのは想像力であり、ここから問題は時間から想像力に移行する。まず想像力が垂直性において働くためには、物質に「参与する」ことが必要である。知覚によって認識される物質が輪郭を持った形であるのに対して、想像力は「物質的参与」によって物質の形を越えた内部にある実質に到達し、そこから新たな風景を創造する。すなわち、ここで想像力は物質の深みにある実質に到達する「物質的想像力」を意味し、それは物質を知覚するのではなく「夢想する」働きである。バシュラールの『水と夢』の中で、池や湖の水の「澄んだ水」が「透明性」

によって風景を映し出すので、その透明性への参与において夢想は水の「深み」に到達し、深みから風景を創造することができる。しかし、風景を反映する水は夜になると空の暗闇によって「暗い水」としての闇になるように、光には暗闇が伴う。すなわち物質的参与における光と闇の「両義性」において水は文学の風景としての「想像的な水」となり、そのとき物質的想像力は深く純粹化された「透明な眼」として風景を創造するところの中心となる。この中心を確立するためには光と暗闇のように逆方向にあるものが想像力において動的に統一されることが必要であり、バシュラールは『空と夢』の中で、その動的な関係を想像力の垂直的運動において明らかにする。ここでの動性は線としての「軌道」でしかないような視覚的に与えられる運動とは区別され、時間の垂直性と同様に運動を垂直性においてとらえることによって、その力動性を生み出すところの中心に到達することになる。この垂直的運動は「上昇」と「下降」という逆方向を同時に含む動性によって説明される。上昇は実際の視覚的な高さではなく、重さによって落下するという下降の方向を乗り越えた飛翔の力である。文学において飛翔する鳥や妖精は、このような上昇を持った「夢の飛翔」によって創造される。文学の風景を創造する想像力が落下を乗り越えた上昇という「垂直的力動性」において働くためには、その落下は「想像的落下」として深められることが必要であり、そのことによって上昇の運動は自律的な「立て直し」として自らを立てる意志となる。すなわち、上昇が下降に対してたたかうという対立関係があることによって上昇と下降は弁証法的に統一された運動となる。鳥や妖精だけではなく、バシュラールは『大地と意志の夢想』の中で山や岩石が重さを乗り越えた上昇としての垂直的運動によって形成されることを指摘する。そのことによって山や岩石は人間を「圧倒する力」の表現となる。このように想像力は風景をその垂直性における形成過程において見る。

第三章では、文学の風景を創造する想像力が物質的参与において確立されることを『大地と意志の夢想』の「労働の想像力」に基づいて考察する。そこでは山や岩石の垂直的力動性が指摘されるが、その力動性を認識するためには土を捏ねたり木を削ったりする物質に関わる労働において、物質の抵抗をとらえることが必要である。換言すれば、ここでは労働としての物質的参与において土や木の柔らかさや硬さを抵抗として乗り越えながら少しずつ形を創造することによって、物質は外側からの知覚においてではなく、物質が形として創造されるところの内的な力、すなわち「内密性」においてとらえられることになる。そのことによって、共通に知覚される対象の現実性とは別に、抵抗のある世界観が「想像力の現実性」として生み出され、文学の中で自然が怪物や妖精として表現されるように力動的な風景を創造する力となる。ここで、内密性に到達する物質的想像力は子ども時代の物質への関わり方を意味し、換言すれば子どもの物質観に到達することによって文学の風景は創造される。この物質的想像力は、F.H.バーネットの『秘密の花園』の中で、大人の介入から守られた「秘密の庭」で子どもたちが庭作りをすることによって枯れ果てたバラの花を生き返らせ、土の中に植えた種が見えないところで動き出して外に向かって芽を出そうとする力に参与することにも見出される。この作品では、庭の風景を創造することによって子どもたちが自律性を確立し、現実の困難を克服する姿が描かれる。このような子どもの世界観に対して、バシュラールの『合理的唯物論』によれば、大人の世界観は「適用」の物質観であり、すなわち技術的に製作された機械設備のある実験室の中で、物質を実験に適用し、その結果を社会的実用性に適用するという「適用される合理主義」である。この大人の世界観が習慣化されると、物質的想像力としての子どもの世界観に戻ることが困難になるので、ベルクソンの持続と同様にバシュラールにおいてもまた、表面における共通性から離れた深みに向かう努力によって子ども時代が探求されることになる。

第四章では、児童文学の中で表現される子どもの世界とバシュラールの子ども観との共通性を通して、子どもという言葉の意味をとらえなおす。アトリーの『時の旅人』の中で、主人公が古い家具の内側に深く閉ざされた過去を夢想することによって風景を創造する世界観がファンタ

ジーの世界へと導く力になる。また、J.M.バリの『ピーター・パン』では、大人にならない子どもであることが飛翔の力となる。このような児童文学における子どもの世界観は、数字によって示される時間と知覚される対象という表面的に共通な世界観から解放された垂直性にあることを示し、その垂直性において最も純粹化された創造の中心としての子ども時代の世界観が見出される。そのとき子ども時代は想像力として、大人であるか子どもであるかに関わらず創造の内的な力となり、現実生活の困難から生じる葛藤を克服する立て直しの力となることができる。従って、子どもの世界観と想像力に到達しようとすることは、創造性と自律性を持って外へと世界を広げていくための中心となる核を作り上げることでもある。